

Prajñāpradīpa-tīkā 第 XXIV 章
テキストと和訳 (1)
– anusam̐dhi & pūrvapakṣa –

赤羽 律・早島 慧・西山 亮

はじめに

Mūlamadhyamaka-kārikā (以下 MMK) の第 XXIV 章は, Nāgārjuna (ca. 150–250) とかれに続く中観派や瑜伽行唯識派ⁱ, 引いては仏教思想全体を理解する上で重要なコンセプトである「二諦 (satyadvaya)」が説き示されている箇所としてよく知られている。この第 XXIV 章に示される「二諦」に関しては MMK の注釈家たちが詳細に論じており, かれらの「二諦」についての言明を通じて各注釈家の認識論・存在論的立場の一端を知ることができる。「二諦」に関する研究ⁱⁱはこれまで多く積み重ねられており, そのことから, この MMK 第 XXIV 章が Nāgārjuna やそれに続く者たちの思想の解明のために重要であることが伺われる。

本稿は, その MMK 第 XXIV 章に対して付された注釈の一つである *Prajñāpradīpa-tīkā* (以下 PPrT) の, Anusam̐dhi と Pūrvapakṣa である。PPrT はその名が示すとおり, Bhāviveka (ca. 500–570) による *Prajñāpradīpa* (以下 PPr) の注釈書であり, つまりは MMK の復注ということになる。Anusam̐dhi というのは聞きなじみのないことばであるかもしれない。その語は本稿で示したように (See chap. 0.2), PPrT の著者である Avalokitavrata (700 年代前半) 自身が章内を区分する用語として用いており, Anusam̐dhi (mtshams sbyar ba) とは前の章とこれから論じる章との「関連」のことである。そのような, 前章とどのようにつながっているのかを示すものとして Anusam̐dhi を提示した後, Pūrvapakṣa つまり対論者からの論難が提示される。本稿はその Pūrvapakṣa まで, つまりそれに対する答論である Uttarapakṣa に入る直前までのテキストと翻訳である。

ⁱ 瑜伽行唯識派の二諦説については, 本稿の執筆者の一人である早島が, 『中辺分別論』における二諦説が修道論に基づいた階層的な二諦説であることを指摘している。なお早島は, これがそれ以前の中観派の文献には見られない独自の二諦説であり, 本稿の扱う PPr の二諦説にも多大に影響していると指摘する (See 早島 [2011])。 ⁱⁱ 概説的に二諦説が説明されている主なものとしては, 長尾 [1947-48] や梶山 [1969] が挙げられ, 両氏とも二諦説について広くかつ詳細に検討し, 特に Nāgārjuna, Bhāviveka, Candrakīrti の二諦説に焦点を当てている。また一郷 [1988] は, Nāgārjuna からはじまり Bhāviveka, Candrakīrti や Jñānagarbha, Śāntarakṣita にいたるまでのインド仏教中観派の歴史を世俗論理解の変遷史と捉え考察しており, 近年では熊谷 [2008] が最新の研究成果を踏まえ, インド仏教からチベット仏教, そしてボン教に至るまでの二諦説を網羅的に考察し, その思想史的な流れを検討している。

本稿に先行する翻訳としては、PPr のみの翻訳も含め次の三つがある。

瓜生津隆真 (Uryuzu, Ryushin) [1971] “Bhāvaviveka’s Prajñāpradīpaḥ (Chapter24)” 『近畿大学教養部研究紀要』 2-2, pp.15-56 (PPr の英訳・部分訳) .

古坂紘一 [1976] 「大乘仏教における二諦説の一考察」, 『大阪教育大学紀要 第 I 部門』 25-3/3, pp.117-131 (PPr の和訳・部分訳) .

那須真裕美 [2000a] 「Prajñāpradīpa-ṭīkā 第 24 章の試訳」, 『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』 21, pp.16-33 (PPrṬ の和訳) .

和訳にあたってはこれらをすべて参照した。これら先人の労作があるにもかかわらず、あえて再び翻訳を試みるのは、テキスト校訂・訳ともに幾分か先人の瑕瑾を修正し、原文に忠実に理解に容易なものを提示したいと願うからである。訳出に当たっては *sDe dge* 版を底本として、*Co ne* 版、*dGa’ ldan* 版ⁱ、*sNar thang* 版、*Peking* 版を校合し、PPr についても同じ 5 版の異読を採取した。今回訳出したテキストのロケーションは以下の通りである。

Parts of *Prajñāpradīpa-ṭīkā* corresponding to this text and translation

- *Co ne*: *za*, 235a4 – 238b1.
- *sDe dge*: Tohoku no. 3859, *za*, 231b7 – 235a5.
- *dGa’ ldan*: no. 3258, *za* 348b6 – 353b3.
- *sNar thang*: *za*, 271b7 – 275b6.
- *Peking*: Otani no. 5259, *za*, 277a6 – 281a3.

(each abbreviation is PPrṬ-C, PPrṬ-D, PPrṬ-G, PPrṬ-N, PPrṬ-P in this paper.)

Parts of *Prajñāpradīpa* corresponding to this text and translation

- *Co ne*: *tsha* 227a2 – 228b4.
- *sDe dge*: Tohoku no. 3853, *tsha* 226a6 – 227b6.
- *dGa’ ldan*: no. 3252, *tsha* 321b4 – 323b6.
- *sNar thang*: *tsha* 258b2 – 260b1.
- *Peking*: Otani no. 5253, *tsha* 284a2 – 286a1.

(each abbreviation is PPr-C, PPr-D, PPr-G, PPr-N, PPr-P in this paper.)

ⁱ Cf. 三宅 [1977], Miyake[2000].

補足

– Prajñāpradīpa-ṭīkā と Avalokitavrata について –

本稿が取り扱う PPrT とその著者 Avalokitavrata について説明を加えておく。Avalokitavrata の年代については本稿の執筆者の一人である赤羽が、8 世紀の諸論師に関する年代測定の判断材料として有効であると思われる「考察されない限り喜ばしいもの (avicāraikaramaṇīya)」と「離一多性を証因とする無自性論証」という二つの表現、主に前者をもとに Avalokitavrata の活躍年代を 700 年代前半と推定している (赤羽 [2003a, b])。近年、van der Kuijp 氏は ‘The Earliest Indian References to Muslims in a Buddhist Philosophical Text of Circa 700’ という論文の中で Avalokitavrata の年代について論じており、Candrakīrti (ca. 600–650) や Dharmakīrti (ca. 600–660) との関係性を考察した上で、かれの活躍年代を 700 年頃としている (van der Kuijp [2006, p. 182.22.]). 赤羽、van der Kuijp 氏に先立つ見解として、羽田野 [1952, p. 166] は、Tāranātha が Avalokitavrata を、*Abhisamayālaṃkāra* の著者 Haribhadra (ca. 800) の「1 世代先輩」としていることから、8 世紀前半に Avalokitavrata の活躍年代をおく。Kajiyama [1963, p. 39]、梶山 [1979b, pp. 308–309, 355, 356] は Candrakīrti と Dharmakīrti の存在を知りながら、Avalokitavrata はこの二人の理論に深く立ち入ることがない、と指摘し、そのことから Avalokitavrata がこの二人と同時代の 7 世紀前半に活躍したと推測している。江島 [1980, p. 16] は、論理学説についての説明などから判断して Avalokitavrata は Dharmakīrti 以降、PPrT のチベット語訳者 Jñānagarbha 以前であり、さらに Tāranātha が Śāntarakṣita (ca. 725–784) と同時代人と伝えていることを理由に、Avalokitavrata の活躍年代を 700 年前後としているⁱ。Dharmakīrti の影響が Avalokitavrata に見られることは梶山氏と江島氏によって指摘されており、Avalokitavrata が Dharmakīrti 以降であることは間違いないと思われるが、Avalokitavrata は Dharmakīrti の理論に深く立ち入っていないが故に同時代人、と梶山氏が推測していることについてはさらに広く PPrT を読み解くことによって検討することが必要であろうⁱⁱ。また、Candrakīrti と Avalokitavrata の関係について、PPrT にその名前が出ていることから Candrakīrti が Avalokitavrata に先行する、ということが想定されるが、丹治氏によって Candrakīrti の名前は後代の挿入である可能性が指摘されているⁱⁱⁱ。PPrT の中に Candrakīrti の思想内容に直接触れている箇所がこれまでに報告されていないことも考えると、この指摘は重要であり、Candrakīrti と Avalokitavrata の関係はその前後関係も含めて、Dharmakīrti の場合と同様、PPrT を広く調査することによって検討する必要がある。

PPrT の梵本は散逸しており、漢訳としても伝わっておらず、テキストはただチベット語訳としてのみ現在確認される。管見の限りであるが、PPrT はインド仏教の典籍において一度も引用されていないようであり (著者名・書名とも一度も言及されない)、その梵本の存在は全く知られていない。瑜伽行唯識派の典籍や仏教論理学を扱う論典などに PPrT の痕跡が認められないのはさて

ⁱ 江島 [1980] は PPrT のチベット語訳者 Jñānagarbha の年代を約 700–760 年としているが、Jñānagarbha 複数人説によると、この年代に生きた Jñānagarbha は *Satyadvayavibhaṅga* を記した人物のことであり、翻訳官 Jñānagarbha は 9 世紀の人物とされている (See 松本 [1978, pp. 109–110], 論書篇 [1990, pp. 269–273]). また、Tāranātha が Avalokitavrata と Śāntarakṣita とを同時代人とみなしている、ということは適当でないと思われる。Tāranātha は中観自立論証派に位置する人物として Avalokitavrata, Śāntarakṣita 等を並べているだけではなかろうか (See 寺本 [1928, pp. 276–277]). なお Bhāviveka と Jñānagarbha も並列されている。 ⁱⁱ 丹治氏は arthakriyāsāmarthya というテクニカルタームを Avalokitavrata が使用していないことから、Avalokitavrata は Dharmakīrti 以前の人物ではないかと推測している。丹治 [1988, p. 215]. ⁱⁱⁱ 丹治 [1988, p. 246, n. 208]. 列挙される順番が年代順であるとすれば、最後にくるはずの Candrakīrti が途中で位置しているのは不自然であり、しかも、かれと同じ帰謬論証派の論師として知られている Buddhapālita の直後に置かれていることから、後代の人が思想的立場を考慮して挿入したのではないかと、丹治氏は推測している。

おき、Avalokitavrataの直後に同じ中観派の系譜の論師として活躍する Śāntarakṣita や Kamaraśīla (ca. 740–795) さえも、かれやかれの著書について言及していないのは、いささか奇異な印象を受けるが、人生の大半をインドで暮らし、60才の時に乞われてチベットに入った Atiśa (ca. 982–1054) が、*Ratnakaraṇodghāta-nāma-Madhyamakopadeśa* と *Bodhimārgapradīpa-pañjikā* の中でかれの名を挙げているⁱので、PPrT がインドで記されたものであることは疑いえないと思われる。

しかし、松本 [1985, n. 19 (= pp.103-105)] は PPrT の撰述問題に対してひとつの疑義を提示している。それは、PPrT に引用される PPr の一節に、梵文を想定しえない箇所があり、さらに、その箇所は PPr のチベット語訳を注釈した疑いがある、というものである。具体的には、Candrakīrti の *Prasannapadā* にパラレルなフレーズが存在していることから梵文を想定し得る、PPr の一節の中の ‘vaiyārthya’ という語に対して、そのチベット語訳が ‘don med pa ñid’ となっている箇所に注目し、その ‘vaiyārthya (= don med pa ñid)’ という PPr の語に対して PPrT が ‘don med pa śes bya ba ni’ と ‘ñid ces bya ba ni’ というように、分けて注釈している点を指摘して、松本氏は、後者の ‘ñid’ だけを取り出すことは、‘vyarthatva’ なら可能であるが、‘vaiyārthya’ からは不可能であると述べている。さらに、PPrT が訳出された時代背景なども勘案し、チベット訳 PPrT がチベット訳 PPr に完全に合致させるために、余分な注釈をしている箇所があるのではないか、という疑問を投げかけているのである。同様の指摘として、古坂 [2001, p. 20, n. 11, p. 18.13–16] は、PPrT に対して注釈を加えているように見える箇所を取り上げ、PPrT においてチベット人による付加が見いだせることを指摘している。

PPrT がすべてチベットで書かれたものであるという指摘はこれまでなされていないようであるが、このような疑義や、インドの仏教典籍に PPrT の痕跡がないことから、実際には確かに、PPrT をインド撰述であると言い切ることは難しいようである。しかしながら、松本氏がただし書きしているように、インド思想全般に関して PPrT が豊富な情報量を提供しているのは疑いようがない。事実、チベットに持ち込まれていない、少なくともチベット語訳されていないと思われる仏教外の典籍『マヌ法典』が PPrT に引用されていることは、PPrT がインドで記された証左となるだろうⁱⁱ。PPrT だけでなく、あらゆるテキストの撰述問題については「何をもって○○撰述とするか」といった基準を立てなければ答えられず、それは今後の研究を待たなければならないが、PPrT に関しては「インドで記されたものであるが、ただし、テキストとして唯一現存するチベット語訳には後代にチベット人によって加筆された可能性がある」ということを作業仮説として立てておく。

(補足部分文責：西山)

ⁱ このことは van der Kuijp [2006, pp. 182.4b–183.2] が指摘している。 ⁱⁱ See de Jong [1988, 1990], Nishiyama [2012].

part 1

Translation

目次

0 前章と本章の関連 (Anusam̐dhi)

0.1 二つの目的 (D231b7-232a2, P277a6-8)

0.1.1 主張を始める契機として示される目的 (D232a2-7, P277a8-b7)

0.1.2 後述部に関連づけられる目的 (D232a7-b1, P277b7-278a1)

0.2 この章の果報とその果報を得る方法 (D232b1-3, P278a1-3)

1 前主張 (Pūrvapakṣa)

1.1 序論 [k. 1ab] (D232b3-6, P278a3-8)

1.2 各論

1.2.1 四聖諦の不成立 [k. 1cd] (D232b6-233a2, P278a8-b3)

1.2.1.1 知断証修の不成立 [k. 2] (D233a2-4, P278b3-6)

1.2.1.2 聖諦の語義解釈 (D233a4-6, P278b6-8)

1.2.1.3 第2偈の語順 (D233a6-7, P278b8-279a1)

1.2.2 四果の不成立 [k. 3ab] (D233a7-b3, P279a1-5)

1.2.3 四果に住する者たちの不成立 [k. 3c] (D233b3-4, P279a5-7)

1.2.4 四向の不成立 [k. 3d] (D233b4-5, P279a7-8)

1.2.5 僧伽の不成立 [k. 4ab] (D233b5-234a1, P279a8-b3)

1.2.6 法の不成立 [k. 4cd] (D234a1-2, P279b3-5)

1.2.7 仏の不成立 [k. 5ab] (D234a2-3, P279b5-7)

1.2.7.1 仏の定義 (D234a4-7, P279b7-280a3)

1.2.8 三宝の不成立 [k. 5cd] (D234a7-b2, P280a3-6)

1.2.9 業果と言語活動の不成立 [k. 6] (D234b2-3, P280a6-7)

1.3 総論

1.3.1 空の否認 (D234b3-235a2, P280a7-b6)

1.3.2 論証式の提示 (D235a2-5, P280b6-281a3)

凡例: () = 指示代名詞の内容や原語, [] = 文意を明瞭にするための原文にはない補い, 【 】 = 原文にはない位置づけ, * = 梵文の想定形; Underline = *Mūlamadhyamaka-kārikā*, **Bold** = *Prajñāpradīpa*.

0 前章と本章の関連 (Anusam̐dhi)

0.1 二つの目的 (D231b7–232a2, P277a6–8)

「さて、〔前章と〕同様に¹、空性についての〔章〕独自の²異論 (*vipakṣa) を否定することによって、『〔四〕聖諦は無自性に他ならない』と説くという目的にそって第 XXIV 章は書かれるのである」と〔師³Bhāviveka が〕言ったなかの「〔目的〕にそって⁴」という語は、ここ（本章）においても、「〔四聖諦は無自性に他ならない〕という主張 (*pratijñā) を始める契機〔として示される〕目的と、後述部に関連づけられる目的〔との二つ〕に依拠して、〔ということ〕であって、ことばの意味は以前と同様である⁵。

0.1.1 主張を始める契機として示される目的 (D232a2–7, P277a8–b7)

そのうち、主張を始める契機〔として示される〕目的のために、「さて、〔前章と〕同様に、空性についての〔章〕独自の異論を否定することによって」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。造論者〔である師 Nāgārjuna⁶〕は、「縁の考察」という第 I 章に着手したところで、「一切の存在 (*bhāva) は生起しない⁷」という主張をなさったので、この〔第 XXIV 章〕においても、造論者〔Nāgārjuna〕が先に〔立てられた〕ような⁸その主張を始める契機〔として示される〕目的のために、そのように「〔空性についての章独自の異論を否定することによって〕と」語ったのである。空性は自らの主張 (*svapakṣa) である。それ（空性）についての異論は対論者 (*prativādin) の主張である。つまり「諸存在は有自性に他ならない」と言うことである。その〔異論〕の独自性とは、「諸存在は有自性に他ならない」と〔自らとは〕別の者が立証〔しよう〕する前主張 (*pūrvapakṣa) を提示することである。「もし、このすべてが空であるならば、生じることもなく滅することもない。四聖諦が汝には無いことになってしまうだろう (k. 1)」という〔第 1 偈〕を始めとする六つの偈によって、「勝義として諸存在は無自性に他ならない」と後で中観派 (dBu ma pa) が語ることに對して、〔反論の〕余地のあることば (*sāvakāśavacana)⁹ を述べて、

【主張】 勝義として諸存在は有自性に他ならない。

【証因】 生じ滅する性質を持っているからである。

などによって諸存在が有自性であることを立証〔しよう〕する推論 (*anumāna) を自ら提示することである。「その〔異論を〕否定することによって」について言えば、「それを否定するために第 XXIV 章は書かれるのである」とつなぐべきである。

0.1.2 後述部に関連づけられる目的 (D232a7–b1, P277b7–278a1)

後述部に関連づけられる目的のために、「『〔四〕聖諦は無自性に他ならない』と説くという目的にそって第 XXIV 章は書かれるのである」と語ったのである。「聖諦の考察」という第 XXIV 章の、後述部の目的は、〔四〕聖諦が無自性に他ならないことを示すことであるから、そのためにそのように語ったのである。

0.2 この章の果報とその果報を得る方法 (D232b1-3, P278a1-3)

この章の果報は何であり、どのような方法でその果報が得られるのかと言うならば、「〔四〕 聖諦は無自性に他ならない」と示されたことが、この〔章〕の果報であり、〔一方〕 空性についての〔この章〕 独自の異論を否定するという方法でその果報が得られるので、それゆえに、注釈者は〔前章と本〕 章の関連 (*anusam̐dhi) というこの箇所において、手段と、手段から生じた果報をまず最初に示したのである。

1 前主張 (Pūrvapakṣa)

1.1 序論 [k. 1ab] (D232b3-6, P278a3-8)

「空性についての〔章〕 独自の異論」という言明そのものを示すために「ここで〔対論者は〕 言う。『汝が示した〔すべてが空であるという〕 考え方に従うと、

【主張】 もしこのすべてが空であるならば、生じることもなく滅することもない (k. 1ab) .

【証因】 空だからである。

【喩例】 たとえば虚空の華のごとし。

と考えることになる』」と〔師 Bhāviveka は〕 語っており、「汝ら中観派が示した〔すべてが空であるという〕 考え方に従うと、もしこれらがすべて空であるならば、生じることと滅することはないので、四聖諦などがないことになるという欠陥となってしまうだろう」という〔反論の〕 余地のあることばを立証〔しよう〕する推論が、これによって提示されているのである。それら〔推論の各支分〕は、基体 (*dharmin), 論証されるべき属性 (*sādhya-dharma), 論証する属性 (*sādhanadharma), 喩例 (*dṛṣṭānta) であると、順次に適用すべきである。

「たとえば虚空の華が空であるが故に生じることと滅することがないのと同様に、もしこの〔中観派の主張する〕 ようにすべてが空であるならば、それ(すべて) もまた¹⁰空であるが故に生じることと滅することがないので、四聖諦などがないという欠陥となるだろう」と〔対論者は〕 言っているのである。

1.2 各論

1.2.1 四聖諦の不成立 [k. 1cd] (D232b6-233a2, P278a8-b3)

その〔対論者が指摘する欠陥〕こそを示すために、「したがって、欠陥は次のとおりであろう。〔このすべての〕 生じることと滅することがないので、苦諦は存在しない。生起していないものは苦ではないからである。そしてそれ(苦諦)が存在しないので集諦は存在しない。それ(苦)が生じる原因であるそれは集であり、それ(集)もまた存在しないからである。そして集〔諦〕¹¹が存在しないならば滅諦は存在しない。それ(集)が滅することがないからである。そして滅諦がないならば道諦もまた存在しない。正見を始めとする滅に向かう道さえも存在しないからである。したがって、四聖諦が汝にとってはないことに陥ってしまおう (k. 1cd)」と〔師 Bhāviveka は〕 語ったのである。

1.2.1.1 知断証修の不成立 [k. 2] (D233a2-4, P278b3-6)

四聖諦が存在しないことによって (k. 2a), 瑜伽師 (*yogin) がそれら〔四聖諦〕を遍知 (*parijñā), 断滅 (*prahāṇa), 証得 (*sāksikarma), 修習 (*bhāvanā) するという努力 (*abhiyoga) 〔によって〕は〔何ら〕得ることがないという欠陥になってしまうと〔いう対論者の見解を〕提示するために, 「そうであるならば, 生死¹²を恐れる瑜伽師たちが, 遍知, 断滅, 証得, 修習する〔行為〕対象である四聖諦に対して, 苦〔諦〕を遍知しよう, 集〔諦〕を断滅しよう, 滅〔諦〕を証得しよう, 道〔諦〕を修習しようという努力, それが妥当ではなくなるので, それ故に〔次のように〕言うのである. 『四聖諦が存在しないことによって, 遍知, 断滅, 修習, 証得が妥当となることはない (k. 2)』」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.2.1.2 聖諦の語義解釈 (D233a4-6, P278b6-8)

「聖諦 (āryasatya)」という語の解析 (*vibhāṣā) を示すために, 「【Tp. 解釈 1】「聖諦 (āryasatya)」というものは聖なるもの (ārya) たちにとっての事実 (satya)」¹³, 【Tp. 解釈 2】あるいは聖なるもの (ārya) を作る事実 (satya), 【Kdh. 解釈】あるいは聖なるもの (ārya) でもあり事実 (satya) でもあるので, 聖諦 (āryasatya) である. 「事実 (satya)」とは「如実」と「無誤謬」の同義語である」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。¹⁴

1.2.1.3 第2偈の語順 (D233a6-7, P278b8-279a1)

「この〔偈頌〕において, 修習と証得の二者が〔順序として〕混乱しているのは, 偈頌の構成 (韻律) に基づいているのである」と述べることによって, その〔偈頌にある〕ように〔順序として〕混乱しているのは, 語感を良くしているのであり, 〔本来は証得を先に示して修習を後に言うべきであって, それぞれの〕対象としては, 滅〔諦〕を先に示して, 道〔諦〕を後に言うべきであると〔師 Bhāviveka は〕言わんとしているのである。

1.2.2 四果の不成立 [k. 3ab] (D233a7-b3, P279a1-5)

あるいはまた, そのように四聖諦が存在しないので, 「四沙門果もまた存在しないという欠陥となる」〔というその対論者の見解〕を示すために, 「さらにまた, 汝には, それらが存在しないので (k. 3a), 〔つまり〕それら四聖諦が存在しないので, 四果も存在しない (k. 3b). 〔四果とは〕預流〔果〕, 一來〔果〕, 不還〔果〕, 阿羅漢〔果〕という〔四種の〕ものであり」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

四聖諦が存在しないことによって (k. 2a) 四沙門果がどうして存在しないことになるのか, 〔その〕の〔対論者の言う〕根拠 (*upapatti) を示すために, 「有身見 (*satkāyadr̥ṣṭi), 疑念 (*vicikitsā), 戒禁取 (*śīla-vrata-parāmarśa) など〔, 四沙門果を得るために断たなければならない〕九十八随眠の欠陥という諸々の薪は, 聖諦を見〔道〕と修道にそって観察するという火によって焼かれるべきであるので, 〔四聖諦が存在しないことによって四沙門果もなくなるの〕である, と〔対論者が〕考えることになる」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.2.3 四果に住する者たちの不成立 [k. 3c] (D233b3-4, P279a5-7)

四沙門果が存在しないならば, 〔それら〕果報に住する四種の人々もまた存在しないという欠陥となることを示すために, 「同様に, 果報が存在しないならば, 果報に住する者たちが存在しない (k. 3c). 〔果報に住する者たちとは〕かの預流〔果〕, 一來〔果〕, 不還〔果〕, 阿羅漢〔果〕

に住する者たちである」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.2.4 四向の不成立 [k. 3d] (D233b4–5, P279a7–8)

果報に住する者が存在しないならば、道にもまた住する者が存在しないという欠陥となることを示すために、「〔果に〕向かう者たち (pratipannaka) も存在しない (k. 3d). 『〔果に〕向かう者たち』とは、預流〔果〕などへの道に住する者たちである」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.2.5 僧伽の不成立 [k. 4ab] (D233b5–234a1, P279a8–b3)

同じように、八輩 (*puruṣapudgala) が存在しないならば、僧伽という宝もまた存在しないという欠陥となることを示すために、「そのようであるならば、人々にとっての福田である世尊の弟子 (八輩) の集まりは魔 (*māra) などによって引き裂かれることはなく他によって乱されずに集まっているから、あるいは戒・定・慧・解脱・解脱知見によって集まっているから、世間的に「僧伽」という名前として呼ばれているもの (八輩の集まり)、〔それ〕もまた存在しないことになる。それ故に、もし、かれら八輩が存在しないならば、僧伽は存在しない (k. 4ab)」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。「道 (= 向) と果報 (= 果) という区別によって言及される者たちである」と言うことによって、「八輩」が説明されているのである。

1.2.6 法の不成立 [k. 4cd] (D234a1–2, P279b3–5)

同様に、僧伽という宝がないとき、法という宝もまた存在しない¹⁵ という欠陥となることを示すために、「また、〔四〕聖諦が存在しないので、正法¹⁶もまた存在しないのである (k. 4cd)」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。その〔対論者の言う〕根拠を示すために、「目的 (*upeya = 聖諦) がなければ手段 (*upāya = 正法) もまた〔存在し〕得ないからである¹⁷、と〔対論者が〕考えることになる」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.2.7 仏の不成立 [k. 5ab] (D234a2–3, P279b5–7)

同様に、僧伽・法という〔二つの〕宝が存在しないならば、仏陀という宝もまた存在しないという欠陥となることを示すために、「法と僧伽が存在しないならば (k. 5a) , 「〔すなわち〕煩惱の薪を焼く者にとって心地よいもの、つまり法と、それ (法) を理解せしめるもの、つまり僧伽〔が存在しないならば〕, ¹⁸ 仏陀がどうして存在するだろうか (k. 5b). 存在することは決してない、ということばの意味である」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.2.7.1 仏の定義 (D234a4–7, P279b7–280a3)

【仏の定義・1】仏陀という語の解析¹⁹を示すために、「この〔偈頌〕の中の『仏陀』とは、事実 (*satya) を理解したお方であり、あるいは〔その事実を人々に〕理解させるお方である。經典において

遍知すべきもの (= 苦) を遍知し、断滅すべきもの (= 集) を断滅し、修習すべきもの (= 道) を修習し終わったので、〔四聖諦との〕結びつき (*kṣānti) を具備している²⁰のである。それ故に私は仏陀なのである。²¹

と仰っているように。

【仏の定義・2】あるいはまた、「本質を欠いているあらゆる法は、公平 (*samatā) である」とご理解なさっているので、仏陀であって、次のように

存在しない諸法は〔端的に〕存在しないとすっかり理解して、存在しない諸法にお気づきになったそのお方が、仏陀と言われるのである。²²

と仰ったように。

【仏の定義・3】あるいはまた、お悟りになって、導かれる者たちを悟らせるので、仏陀である」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

それ (= 仏陀) が存在しないという欠陥となる根拠を示すために、「その仏陀もまた、【1】知つまり智慧と、【2】知の対象つまり法と、【3】理解させられる者たちつまり導かれる者たち²³が存在しないために不合理であるので、仏陀もまた存在しないことになる」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.2.8 三宝の不成立 [k. 5cd] (D234a7-b2, P280a3-6)

したがって、「以上のように語るならば、三宝を拒斥するのである²⁴ (k. 5cd)」というのはまどめである。「『以上のように語るならば』とは何を〔語る〕のかというならば、空性である」というのは、中観派が空性を語るならば、三宝を拒斥するのである、とつなぐべきである。「宝とは、得難いものであり (*durlabha)、とても貴重なものであり、喜ばしいものであり、ためになるものであり、拒斥をなす非人などの対治である、という意味として〔宝〕である」ということによつて、宝という語の解析を示しているのである。

1.2.9 業果と言語活動の不成立 [k. 6] (D234b2-3, P280a6-7)

また、空性を語るならば他にも、世間的な果報²⁵と、不善〔業〕 (*akuśala) と善〔業〕 (*kuśala) と、あらゆる言語活動 (*vyavahāra) を拒斥するという欠陥ともなってしまうことを示すために、「また〔空性を語るならば〕他にも、果報の存在と、非法 (adharmā=不善) と法 (dharma=善)、そしてすべての言語活動を、拒斥するのである (k. 6)」と〔師 Bhāviveka は〕語ったのである。

1.3 総論

1.3.1 空の否認 (D234b3-235a2, P280a7-b6)

「そのように認めていない」を始めとする〔文章〕によつて、〔次のことが示されている〕。「汝ら中観派が示した考え方に従うと、もしこれらすべてが空であるならば、生じることと滅することはないので、四聖諦などがないことになってしまうだろう」という、そのように、我々他派 (*nikāyāntariya) は認めていないのであり、〔というのも我々が〕言ったとおりの、〔三宝などや、業果、言語活動がないことになるという〕欠陥に陥ってしまうからである。以上は「『諸存在は無自性に他ならない』と語る汝ら中観派のことばに対して、以上のような〔反論の〕余地がある」と示しているのである。

その〔反論の〕余地のあることば (= 中観派の主張) を反転させて、他派が認めているような当面の意味そのものを示すために、「〔これまで〕述べたとおりの欠陥となってしまうことを取り除くのは『〔諸存在は〕まさに空ではなく、生じることと滅することもあるならば、〔諸存在に

は] 自性が必ず存在すること, [諸存在が] 生じ滅するという属性を必ず持っていることから, 論証されるべき属性である『有自性性』と, 論証する属性である『生じ滅する属性を必ず持っていること』は明らかである』というようなことばの内容である。[中観派の主張は反論の] 余地のあることばであるから [、我々他派はそのようには認めていないのである]』と [師 Bhāviveka は] 語ったのである。

まさにそのことを譬喩をもって示すために, 「たとえば [次の] ごとし, 『もし音声は常住であるならば, [そもそも音声は] 作られていなかったものとなるであろう。[つまり] 作られていないものを常住であると認知することになる。[一方, 音声を] 認知するならば, [それは] 作られたものとならない』ということにしたがって, [これまで] 述べたとおりの欠陥となってしまうことを取り除くのは, 『無常なるものには所作 [性] があるので, 音声は無常である。[なぜならば] 作られたものだからであるということから, 論証されるべき属性が「無常」であり, 論証する属性が「所作性」であることは明らかである』ということばの内容である』と [師 Bhāviveka は] 語ったのである。

1.3.2 論証式の提示 (D235a2–5, P280b6–281a3)

まさにそのことの推論を示すために, 「ここで論証式 (*prayoga-vākya) は [次の通り]。

【主張】 勝義として諸存在は有自性に他ならない。

【証因】 生じ滅する属性を必ず持っているから。

【喩例】 たとえば虚空の華のごとく, およそ自性が存在しないものには, 生じ滅することが見られない。

【適合】 諸存在には, 無 (*abhūta) から生じることと, 生じてから滅することとがある。

【結論】 したがって, 述べたとおりの証因に基づいて, 勝義として諸存在は有自性に他ならないのである」

と [師 Bhāviveka は] 語ったのである。

それら [推論の各支分] は, 基体, 論証されるべき属性, 論証する属性, 非類似性を主張する喩例, 適合の連結と, 結論であると, 順次に適用すべきである。虚空の華のように生じることと滅することがないものは, 無自性であるが, 諸存在は生じることと滅することとがあるので, したがって, 勝義として諸存在は有自性に他ならないのであると, この [論証式] は言っているのである。

まず, 以上が空性についての [章] 独自の異論であり, [それを] 前主張を述べる者たちの言い分として [次の後主張 (*uttarapakṣa) に] つなぐべきである。

part 2

Text

Contents

0 Anusamdhī

0.1 Two aims (D231b7–232a2, P277a6–8)

0.1.1 The aim of denying *Pūrvapakṣa* (D232a2–7, P277a8–b7)0.1.2 The aim connected with *Uttarapakṣa* (D232a7–b1, P277b7–278a1)

0.2 The fruits of this chapter and the way to obtain them (D232b1–3, P278a1–3)

1 Pūrvapakṣa

1.1 Introduction [k. 1ab] (D232b3–6, P278a3–8)

1.2 Detailed explanations

1.2.1 Failure of the four *āryasatyas* to exist [k. 1cd] (D232b6–233a2, P278a8–b3)

1.2.1.1 Failure of an effort to exist [k. 2] (D233a2–4, P278b3–6)

1.2.1.2 Etymology of *āryasatyā* (D233a4–6, P278b6–8)

1.2.1.3 Word order in verse 2 (D233a6–7, P278b8–279a1)

1.2.2 Failure of the four fruits to exist [k. 3ab] (D233a7–b3, P279a1–5)

1.2.3 Failure of the attainers for the fruits to exist [k. 3c] (D233b3–4, P279a5–7)

1.2.4 Failure of the strivers of the fruits to exist [k. 3d] (D233b4–5, P279a7–8)

1.2.5 Failure of the *Samgha* to exist [k. 4ab] (D233b5–234a1, P279a8–b3)1.2.6 Failure of the *Dharma* to exist [k. 4cd] (D234a1–2, P279b3–5)1.2.7 Failure of the *Buddha* to exist [k. 5ab] (D234a2–3, P279b5–7)1.2.7.1 Definitions of “*Buddha*” (D234a4–7, P279b7–280a3)

1.2.8 Failure of the three jewels to exist [k. 5cd] (D234a7–b2, P280a3–6)

1.2.9 Failure of the karmic fruits and linguistic activity to exist [k. 6] (D234b2–3, P280a6–7)

1.3 General discussion

1.3.1 Denial existence of Emptiness (D234b3–235a2, P280a7–b6)

1.3.2 Presentation of five-part syllogism (D235a2–5, P280b6–281a3)

*Underline = *Mūlamadhyamaka-kārikā*, **Bold** = *Prajñāpradīpa*; ins. = insert(s), om. = omit(s).

0 Anusam̐dhi

0.1 Two aims (D231b7–232a2, P277a6–8)

da ni de b̐zin du stoñ pa ñid kyi mi mthun pa'i phyogs kyi khyad par dgag pas / 'phags pa'i bden pa rnams ño bo ñid med pa ñid du bstan pa'i don gyi dbañ gisⁱ rab tu byed pa ñi śu b̐zi pa brtsam mo źes bya ba la / dbañ gis źes bya ba'i sgraⁱⁱ skabs 'dir yañ dam bcas pa la 'jug pa'i rgyu'i donⁱⁱⁱ dañ / gźuñ 'og nas 'byuñ ba dañ sbyar ba'i don du bltas te^{iv} / tshig gi don ni śna ma b̐zin no //

0.1.1 The aim of denying *Pūrvapakṣa* (D232a2–7, P277a8–b7)

de la dam bcas pa la 'jug pa'i rgyu'i don gyi dbañ du byas nas / **da ni de b̐zin du stoñ pa ñid kyi mi^v mthun pa'i phyogs kyi khyad par dgag pas** źes bya ba smras te / bstan bcas mdzad pas rkyen brtag pa'i rab tu byed pa dañ po brtsams pa'^{vi} skabs su dños po thams cad skye ba med par dam bca' ba mdzad pas / 'dir yañ bstan bcas mdzad pas / śnar ji ltar dam bcas pa de la 'jug pa'i rgyu'i don gyi dbañ du byas nas de skad smras te / **stoñ pa ñid** ni rañ gi phyogs yin no // de'i **mi mthun pa'i phyogs** ni phyir rgol ba'i phyogs yin te / 'di lta ste / dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du smra ba yin no // de'i **khyad par** źes bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid^{vii} du sgrub pa'i phyogs śna ma ñe bar gźag pa / 'og nas /

gal te 'di dag kun stoñ na //

'byuñ ba med ciñ 'jig pa med //

'phags pa'i bden pa b̐zi po rnams //

khyod la med par thal bar 'gyur // k. 1^{viii}

źes bya ba la sogs pa tshig le'ur byas pa drug gis dbu ma pa don dam par dños po rnams ño bo ñid med pa ñid du smra ba la glags yod pa'i tshig dag bstan nas / rañ gis don dam par dños po rnams ño bo ñid yod pa kho na yin te / 'byuñ ba dañ 'jig pa'i chos can yin pa'i phyir ro^{ix} źes bya ba la sogs pas dños po rnams ño bo ñid yod par sgrub pa'i rjes su dpag pa dag ston pa yin no // de **dgag pas** źes bya ba ni de **dgag pa**'i dbañ du byas nas **rab tu byed pa ñi śu b̐zi pa brtsam mo** źes bya bar sbyar ro //

0.1.2 The aim connected with *Uttarapakṣa* (D232a7–b1, P277b7–278a1)

gźuñ 'og nas 'byuñ ba dañ sbyar ba'i don gyi dbañ du byas nas / **'phags pa'i bden pa rnams ño bo ñid med pa ñid du bstan pa'i don gyi dbañ gis^x rab tu byed pa ñi śu b̐zi pa brtsam mo** źes bya ba smras te / 'phags pa'i bden pa brtag pa'i rab tu byed pa ñi śu b̐zi pa'i gźuñ 'og nas 'byuñ ba

ⁱ PPr ins. / ⁱⁱ PPrT-G ins. da ⁱⁱⁱ PPrT-G ins. don ^{iv} PPrT-DC bltas te : PPrT-PNG lta ste ^v PPrT-G om. mi
^{vi} PPrT-PNG brtsam pa'i ^{vii} PPrT-PNG om. yod pa ñid ^{viii} MMK k. 1: **yadi śūnyam idaṃ sarvaṃ udayo nāsti na vyayaḥ / caturṇām āryasatyānām abhāvas te prasajyate //** ^{ix} PPrT-PNG ins. // ^x PPrT-PG ins. /

'di'i don ni 'phags pa'i bden pa rnam s no bo ñid med pa' ñid du bstan pa yin pas / de'i dba' du byas nas de skad smras so //

0.2 The fruits of this chapter and the way to obtain them (D232b1–3, P278a1–3)

rab tu byed pa 'di'i 'bras bu ni gañ yin / rnam pa gañ gis ni 'bras bu de 'thob ce na / 'phags pa'i bden pa rnam s no bo ñid med pa ñid du bstan pa ni 'di'i 'bras bu yin la / **stoñ pa ñid kyi mi mthun pa'i phyogs kyi khyad par dgag pa'i** rnam pas ni 'bras bu de 'thob pas / de'i phyir 'grel pa byed pas rab tu byed pa'i mtshams sbyar ba'i skabs 'dir / thabs dañ thabs las byuñ ba'i 'bras bu dañ po kho nar bstan to //

1 Pūrvapakṣa

1.1 Introduction [k. 1ab] (D232b3–6, P278a3–8)

stoñ pa ñid kyi mi mthun pa'i phyogs kyi khyad par zes bya ba smos pa de ñid bstan pa'i phyir / 'dir smras pa / khyod kyi bstan pa'i tshul gyis ni /ⁱⁱ

gal te 'di dag kun stoñ na //

'byuñ ba med ciñ 'jig pa med // k. 1ab ⁱⁱⁱ

stoñ pa'i phyir / ^{iv}dper na nam mkha'i me tog bzin no ^vzes bya bar bsams^{vi} so ^{vii}zes bya ba smras te / 'dis ni khyed dbu ma^{viii} pas bstan pa'i tshul gyis / gal te 'di dag kun stoñ na // 'byuñ ba dañ ^{ix}'jig pa med pas / **'phags pa'i bden pa bzi** la sogs pa med par thal ba' i skyon du **'gyur** ro ^x zes glags yod pa'i tshig sgrub pa'i rjes su dpag pa ston te / de dag ni chos can dañ / bsgrub par bya ba chos dañ / sgrub^{xi} pa'i chos dañ / dpe yin par go rims^{xii} bzin du sbyar te /

dper na nam mkha'i me tog ni stoñ pa'i phyir / **'byuñ ba** dañ **'jig pa med** pa de bzin du / gal te 'di ltar **kun**^{xiii} **stoñ** na de yañ stoñ pa'i phyir^{xiv} **'byuñ ba** dañ **'jig pa med** pas **'phags pa'i bden pa bzi** la sogs pa med pa' i skyon du **'gyur** ro ^{xv} zes zer ro //^{xvi}

1.2 Detailed explanations

1.2.1 Failure of the four āryasatyas to exist [k. 1cd] (D232b6–233a2, P278a8–b3)

de ñid bstan pa'i phyir / **de'i phyir skyon 'di ltar**^{xvii} **'gyur te / 'byuñ ba dañ 'jig pa med pa'i phyir** /^{xviii} **ma skyes pa ni sdug bsñal ma yin pas** ^{xix}**sdug bsñal gyi bden pa med pa dañ / de med**

ⁱ PPrT-G om. pa ⁱⁱ PPrT, PPr-PNG // ⁱⁱⁱ MMK k. 1ab: yadi śūnyam idam sarvam udayo nāsti na vyayah / ^{iv} PPr om. / ^v PPrT-PG, PPr-PNG ins. // ^{vi} PPr-PNG dgoñs ^{vii} PPr ins. // ^{viii} PPrT-G mas ^{ix} PPrT-G ins. / ^x PPrT-PNG ins. // ^{xi} PPrT-N bsgrub ^{xii} PPrT-G rim ^{xiii} PPrT-PNG om. kun ^{xiv} Although the original text (PPrT and PPr) here is “gal te 'di ltar kun stoñ pa yañ stoñ pa'i phyir”, we read it in this way based on “gal te 'di dag kun stoñ na de yañ no bo ñid med pa'i phyir (D za 249b3)” in PPrT chap. XXV. ^{xv} PPrT-PNG ins. // ^{xvi} PPrT-N om. zes zer ro // ^{xvii} PPrT-D 'di ltar : PPrT-PNG, PPr 'di lta bur ^{xviii} PPr om. / ^{xix} PPrT-PNG, PPr ins. /

pa'i phyir /ⁱ gañ las de kun 'byuñ ba de kun 'byuñ yin pa // de yañ med pas /ⁱⁱ kun 'byuñ gi bden pa med pa dañ / kun 'byuñ medⁱⁱⁱ na de 'gog pa med pa'i phyir / 'gog pa'i bden pa med pa dañ /^{iv} 'gog pa'i bden pa med na /^v 'gog par 'gro ba'i lam yañ dag pa'i^{vi} lta ba sñon du btañ ba yañ^{vii} med pa'i phyir / lam gyi bden pa yañ med pas /

'phags pa'i bden pa bži po rnams //^{viii}
khyod la med par thal bar 'gyur //^{ix} k. 1cd^x

žes bya ba smras so //

1.2.1.1 Failure of an effort to exist [k. 2] (D233a2–4, P278b3–6)

'phags pa'i bden pa bži med pas //^{xi} rnal 'byor pas de dag yoñs su śes pa dañ / spañ ba dañ / mñon sum du bya ba dañ / bsgom^{xii} pa'i mñon par brtson pa mi 'thob pa'i skyon du 'gyur bar bstan pa'i phyir / des na rnal 'byor pa^{xiii} skye ba dañ^{xiv} 'chi bas 'jigs pa rnams kyis /^{xv} 'phags pa'i bden pa bži po yoñs su śes pa dañ / spañ ba dañ /^{xvi} mñon sum du bya ba dañ / bsgom pa'i^{xvii} yul la sdug^{xviii} bsñal yoñs su śes par bya ba dañ / kun 'byuñ^{xix} spañ bar bya ba dañ / 'gog pa mñon sum du bya ba dañ / lam bsgom par^{xx} bya ba'i mñon par brtson pa gañ yin pa de mi^{xxi} 'thad pas^{xxii} / de'i phyir smras pa /

'phags pa'i bden pa bži med pas //^{xxiii}
yoñs su śes dañ spañ^{xxiv} ba dañ //^{xxv}
bsgom dañ^{xxvi} mñon du bya ba dag^{xxvii} //^{xxviii}
'thad par 'gyur ba ma yin no //^{xxix} k. 2^{xxx}

žes bya ba smras so //^{xxxi}

1.2.1.2 Etymology of āryasatyā (D233a4–6, P278b6–8)

'phags pa'i bden pa žes bya ba'i sgra bye brag tu bśad pa bstan pa'i phyir / 'phags pa'i bden pa žes^{xxxii} bya ba ni^{xxxiii} 'phags pa rnams kyi bden pa'am / 'phags par byed pa'i bden pa'am / 'phags pa yañ yin la / bden pa yañ yin pas 'phags pa'i bden pa'o // bden pa žes bya ba ni^{xxxiv} yañ dag pa dañ / ma nor ba žes bya ba dag gi rnam grañs so^{xxxv} žes bya ba smras so //

1.2.1.3 Word order in verse 2 (D233a6–7, P278b8–279a1)

ⁱ PPrT-DCNG om. / ⁱⁱ [PPrT-DC] gañ las / de kun 'byuñ ba de kun 'byuñ yin pa // de yañ med pas /; [PPrT-PN] gañ las de kun 'byuñ ba de kun 'byuñ ba de kun 'byuñ ba yin pa de yañ med pas /; [PPrT-G] gañ las de kun 'byuñ ba de kun 'byuñ ba de kun 'byuñ ba de yin pa de yañ med pas /; [PP-DC] gañ las de kun 'byuñ ba yin pa de yañ med pas /; [PP-PNG] gañ las de kun 'byuñ ba de kun 'byuñ ba yin pas / ⁱⁱⁱ PPr-D mid ^{iv} PPr-C // ^v PPrT-P, PPr om. / ^{vi} PPr-PNG ins. lam yañ dag pa'i ^{vii} PPrT-PNG om. yañ ^{viii} PPr-D / ^{ix} PPrT-G, PPr-C / ^x MMK k. 1cd: caturnām āryasatyānām abhāvas te prasajyate // ^{xi} PPrT-PNG / ^{xii} PPrT-G sgom ^{xiii} PPrT-D ba ^{xiv} PPrT skye ba dañ: PPr med pa dañ / ^{xv} PPr om. / ^{xvi} PPr-DC om. / ^{xvii} PPrT-PNG sgom pa'i ^{xviii} PPr-N bsdug ^{xix} PPrT-PNG ins. ba ^{xx} PPrT-P sgom par ^{xxi} PPr-PNG ma ^{xxii} PPr 'thob pas ^{xxiii} PPrT-PNG, PPr-DPCN / ^{xxiv} MMK spoñ ^{xxv} PPrT-PG, PPr-PG / ^{xxvi} PPrT-DC bsgom dañ: PPrT-PNG sgom pa: MMK sgom dañ ^{xxvii} PPrT-DC dag: PPrT-PNG dañ ^{xxviii} PPrT-P, PPr / ^{xxix} PPrT-P / ^{xxx} MMK k. 2: parijñā ca prahāṇam ca bhāvanā sāksikarma ca / caturñām āryasatyānām abhāvanā nopapadyate // ^{xxxi} PPrT-DC so //: PPrT-PNG te / ^{xxxii} PPr-G ins. pa ^{xxxiii} PPr ins. / ^{xxxiv} PPr-DC ins. / ^{xxxv} PPrT-PNG, PPr ins. //

'dir bsgom paⁱ dan / mñon sum du bya ba gñis bsnor ba ni ⁱⁱtshigs su bcad pa bsdebⁱⁱⁱ pa'i dbaṅ gis so ^{iv}žes bya bas ni de ltar bsnor ba ni tshig bde bar byas kyi don gyis ni ^v'gog pa sñar bstan pa la lam phyis^{vi} smos pa yin par bstan to //

1.2.2 Failure of the four fruits to exist [k. 3ab] (D233a7–b3, P279a1–5)

gžan yaṅ de ltar / 'phags pa'i bden pa bži po dag med pas dge sbyoṅ gi 'bras bu bži yaṅ med pa'i skyon du 'gyur bar bstan pa'i phyir / yaṅ gžan yaṅ ^{vii}khyod la /^{viii}

de dag yod pa^{ix} ma yin pas // k. 3a ^{xi}

'phags pa'i bden pa bži po de dag yod pa ma yin pas so //

'bras bu bži yaṅ yod ma yin //^{xii} k. 3b ^{xiii}

rgyun du^{xiv} žugs pa dan / lan cig phyir 'oṅ ba dan / phyir mi 'oṅ ba dan /^{xv} dgra bcom pa žes bya ba dag ste žes bya ba smras so //

'phags pa'i bden pa bži med pas / dge sbyoṅ gi 'bras bu bži ji ltar med par 'gyur ba'i 'thad pa bstan pa'i phyir / 'jig ^{xvi}tshogs la lta ba dan / the tshom dan / tshul khriṃs dan ^{xvii}brtul žugs mchog tu 'dzin pa la sogs pa'i phra rgyas dgu bcu rtsa brgyad kyi^{xviii} skyon^{xix} gyi bud śin dag ^{xx}'phags pa'i bden pa mthoṅ ba^{xxi} dan bsgom^{xxii} pa'i lam gyis /^{xxiii} mthoṅ ba'i mes bsreg par^{xxiv} bya ba^{xxv} yin pa'i phyir ro ^{xxvi}žes bya bar bsams so ^{xxvii}žes bya ba^{xxviii} smras so //

1.2.3 Failure of the attainers for the fruits to exist [k. 3c] (D233b3–4, P279a5–7)

dge sbyoṅ gi 'bras bu bži med na / 'bras bu la gnas pa'i gaṅ zag bži yaṅ med pa'i skyon du 'gyur bar bstan pa'i phyir ^{xxix}de ltar /^{xxx}

'bras bu med na 'bras gnas med //^{xxxii} k. 3c ^{xxxiii}

rgyun du žugs pa dan / lan cig^{xxxiii} phyir 'oṅ ba dan / phyir mi 'oṅ ba dan / dgra bcom pa'i 'bras bu la gnas pa de dag go ^{xxxiv}žes bya ba smras so //

1.2.4 Failure of the strivers of the fruits to exist [k. 3d] (D233b4–5, P279a7–8)

'bras bu la gnas pa med na / lam la yaṅ gnas pa med pa'i skyon du 'gyur bar bstan pa'i phyir /

žugs pa dag kyaṅ yod ma yin // k. 3d ^{xxxv}

ⁱ PPrT-PNG sgom pa ⁱⁱ PPr ins. / ⁱⁱⁱ PPr-DC sdeb ^{iv} PPrT-P ins. / PPrT-NG PPr ins. // ^v PPrT-DC ins. / ^{vi} PPrT-PNG gyis ^{vii} PPrT-PN ins. / PPrT-N ins. // ^{viii} PPrT om. / ^{ix} PPrT-G par ^x PPrT, PPr-PNG / ^{xi} MMK k. 3a: tadabhāvān ^{xii} PPr-PNG / ^{xiii} MMK k. 3b: na vidyante catvāry āryaphalāni ca /. Cf. catvāryāryaphalāni read, catvāry api phalāni (Tib:yang, MMK-XXIV k. 27cd: pariññavarana yujyate catvāry api phalāni). ^{xiv} PPr-P tu ^{xv} PPr-G om. phyir mi 'oṅ ba dan / ^{xvi} PPr-C ins. rte ^{xvii} PPr ins. / ^{xviii} PPrT-DCPG ins. phra rgyas dgu bcu rtsa brgyad kyi ^{xix} PPr-N ins. ni ^{xx} PPr ins. / ^{xxi} PPr mthoṅ ba'i ^{xxii} PPrT-PNG sgom ^{xxiii} PPrT-DCPG ins. mthoṅ ba dan bsgom pa'i lam gyis / ^{xxiv} PPrT-DC bsreg par : PPrT-PNG bsreg pa de ^{xxv} PPrT bsreg par bya ba : PPr sreg par byed pa ^{xxvi} PPr-PNG ins. // ^{xxvii} PPr ins. // ^{xxviii} PPrT-G bar ^{xxix} PPrT-PNG ins. / ^{xxx} PPrT-PG om. / ^{xxxi} PPrT-PNG / ^{xxxii} MMK k. 3c: phalābhāve phalasthā no ^{xxxiii} PPr-G om. cig ^{xxxiv} PPrT-N ins. / ^{xxxv} MMK k. 3d: na santī pratipannakāh //

žugs pa dag ni rgyun duⁱ žugs pa la sogs pa'i lam laⁱⁱ gnas pa dag go žes bya ba smras so //

1.2.5 Failure of the *Samgha* to exist [k. 4ab] (D233b5–234a1, P279a8–b3)

de ltar skyes bu gañ zag brgyad med na / dge 'dun dkon mchog kyañ med pa'i skyon du 'gyur barⁱⁱⁱ bstan pa'i phyir / de lta^{iv} na bcom ldan 'das kyi^v ñan thos kyi tshogs 'gro ba'i bsod nams kyi^{vi} žiñ bdud la sogs pas mi phyed ciñ^{vii} gžan gy driñ mi^{viii} 'jog^{ix} pas^x 'dus^{xi} pa'i phyir ram / tshul khriims dañ^{xii} tiñ ñe 'dzin dañ / šes rab dañ / rnam par grol ba dañ / rnam par grol ba'i ye šes mthoñ ba dag gis 'dus^{xiii} pa'i phyir^{xiv} 'jig rten na mtshan dge 'dun žes bya bar rnam par grags pa yañ med par 'gyur bas /

gal te skyes bu gañ zag brgyad //

de dag med na dge 'dun med //^{xv} k. 4ab^{xvi}

ces bya ba smras so // gañ dag lam dañ 'bras bu'i dbye bas^{xvii} rnam par bśad pa dag go žes bya bas^{xviii} ni skyes bu gañ zag brgyad bstan to //

1.2.6 Failure of the *Dharma* to exist [k. 4cd] (D234a1–2, P279b3–5)

de ltar dge 'dun dkon mchog^{xix} med na / chos dkon mchog kyañ med pa'i skyon du 'gyur ba bstan pa'i phyir / gžan yañ /

'phags pa'i bden rnam med pa'i phyir //

dam pa'i chos kyañ yod ma yin // k. 4cd^{xx}

žes bya ba smras so // de'i 'thad pa bstan pa'i phyir^{xxi} thabs las byuñ ba med na thabs kyañ mi srid pa'i phyir ro žes bya bar bsams so^{xxii} žes bya ba smras so //

1.2.7 Failure of the *Buddha* to exist [k. 5ab] (D234a2–3, P279b5–7)

de ltar dge 'dun dañ / chos dkon mchog med na / sañs rgyas dkon mchog kyañ med pa'i skyon du 'gyur bar bstan pa'i phyir /

chos dañ dge 'dun yod min na // k. 5a^{xxiii}

chos^{xxiv} ñon moñs pa'i bud šin bsreg^{xxv} pa la 'jeps pa dañ / dge 'dun^{xxvi} de rtogs par byed pa'o //

sañs rgyas ji ltar yod par 'gyur //^{xxvii} k. 5b^{xxviii}

yod par mi 'gyur ba ñid do žes bya ba'i tshig gi don to žes bya ba smras so //

ⁱ PPr-PNG tu ⁱⁱ PPr-PNG om. la ⁱⁱⁱ PPrṬ-PNG ba ^{iv} PPrṬ-G ltar ^v PPr-N kyis ^{vi} PPrṬ-G ins. tshogs ^{vii} PPrṬ-P ins. / ^{viii} PPr-C ma ^{ix} PPr-DCN 'jogs ^x PPrṬ-P, PPr ins. / ^{xi} PPrṬ-P, PPr bsdus ^{xii} PPrṬ-PNG om. / ^{xiii} PPrṬ-P, PPr bsdus ^{xiv} PPr ins. / ^{xv} PPrṬ-G om. // ^{xvi} MMK k. 4ab: samgho nāsti na cet santī te 'stau purusapudgalāh / ^{xvii} PPrṬ-PNG ba ^{xviii} PPrṬ-PNG ba ^{xix} PPrṬ-G ins. kyañ ^{xx} MMK k. 4cd: abhāvāc cāryasatyānām saddharmo 'pi na vidyate // ^{xxi} PPrṬ-PNG ins. / ^{xxii} PPr ins. // ^{xxiii} MMK k. 5a: dharme cāsati samghe ca ^{xxiv} PPr om. chos ^{xxv} PPr-D bsregs, PPr-PNG sreg ^{xxvi} PPr om. dge 'dun ^{xxvii} PPr-PN /, PPr-G ins. / yod par 'gyur / ^{xxviii} MMK k. 5b: katham buddho bhaviṣyati /

1.2.7.1 Definitions of “Buddha” (D234a4–7, P279b7–280a3)

sañs rgyas źes bya ba’i sgra bye brag tu bśad pa bstan pa’i phyir ’di la sañs rgyas źes bya ba ni bden pa rnams rtogsⁱ par gyur pa’am / rtogsⁱⁱ par mdzad pa deⁱⁱⁱ / mdo sde las^{iv} ji skad du /

yoñs su śes bya yoñs śes śiñ //
 spañ bar bya ba spañs par^v gyur^{vi} //
 bsgom par bya ba bsgoms zin pas //
 bzod ldan de phyir ña sañs rgyas //

źes gsuñs pa lta bu’o //

yañ na^{vii} chos thams cad dños po med pa mñam pa ñid^{viii} thugs su chud pas sañs rgyas te / ji skad du /^{ix}

gañ gis chos rnams yod min pa //
 yod min ma lus rtogs gyur ciñ //
 yod min chos rnams sañs rgyas pa //
 de ni sañs rgyas źes bya’o //

źes gsuñs pa lta bu’o //

yañ na^x sañs rgyas par gyur ciñ^{xi} gdul^{xii} ba rnams sañs rgyas par mdzad pas^{xiii} sañs rgyas so^{xiv} źes bya ba smras so //

de med pa’i skyon du ’gyur ba’i ’thad pa bstan pa’i phyir / sañs rgyas de yañ rtogs^{xv} pa ye śes dañ^{xvi} rtogs par bya ba chos dañ /^{xvii} rtogs par byed du gźug pa gdul ba rnams med pa’i phyir mi rigs pas sañs rgyas kyañ med par ’gyur ro^{xviii} źes bya ba smras so //^{xix}

1.2.8 Failure of the three jewels to exist [k. 5cd] (D234a7–b2, P280a3–6)

de ltar^{xx} /^{xxi}

de skad smra na dkon pa’i mchog /^{xxii}
gsum la gnod pa byed pa yin // k. 5cd^{xxiii}

źes bya ba ni mjug bsdu ba yin no // de skad smra na źes bya ^{xxiv} ci źig ce na / stoñ pa ñid do ^{xxv} źes bya ba ni dbu ma pa stoñ pa ñid du smra na dkon mchog gsum la gnod pa byed pa yin no źes bya bar sbyar ro // dkon mchog ces bya ba ni ^{xxvi} dkon pa dañ / rin che ba dañ / dga’ bar byed pa dañ / phan ’dogs pa dañ / mi ma yin pa la sogs pa gnod par ^{xxvii} byed pa’i gñen po’i don gyis so ^{xxviii} źes bya bas ni dkon mchog ces bya ba’i sgra bye brag tu bśad pa bstan to //

ⁱ PPr-PN rtog ⁱⁱ PPr-PNG rtog ⁱⁱⁱ PPr-PNG ste ^{iv} PPr-PNG ins. / ^v PPr-PNG spañ bar ^{vi} PPrT-DCP ’gyur
^{vii} PPrT-G ins. sañs rgyas ^{viii} PPr ins. du ^{ix} PPrT-PNG om. / ^x PPr-N om. na ^{xi} PPr ins. / ^{xii} PPr-P ’dul
^{xiii} PPr-PN pa ^{xiv} PPr ins. // ^{xv} PPr-PG rtog ^{xvi} PPr ins. / ^{xvii} PPrT-PNG om. / ^{xviii} PPr ins. // ^{xix} PPrT-G ins.
 de med pa’i skyon du ’gyur ba’i ’thad par bstan pa’i phyir // sañs rgyas de yañ rtogs pa ye śes / ^{xx} PPrT-DCPG, PPr de ltar :
 PPrT-N de ltar na ^{xxi} PPr-C om. / ^{xxii} PPr-G // ^{xxiii} MMK k. 5cd: evam trīny api ratnāni bruvāṇaḥ pratibādhase //
^{xxiv} PPrT-PNG, PPr ins. ba ^{xxv} PPr ins. // ^{xxvi} PPrT-P, PPr ins. / ^{xxvii} PPrT-P, PPr pa ^{xxviii} PPr ins. //

1.2.9 Failure of the karmic fruits and linguistic activity to exist [k. 6] (D234b2–3, P280a6–7)

gžan yañ stoñ pa ñid du smra na 'jig rten pa'i 'brasⁱⁱ bu dañ / mi dge ba dañ / dge ba dañ / tha sñad thams cad laⁱⁱⁱ gnod pa byed pa'i skyon du yañ 'gyur bar bstan pa'i phyir^{iv}

gžan yañ 'bras bu yod pa dañ /
chos ma yin pa dañ chos ñid dañ // ^{vii}
'jig rten pa yi ^{viii} tha sñad ni // ^{ix}
kun la'añ gnod pa byed pa yin // ^x k. 6 ^{xi} ^{xii}

žes bya ba smras so //

1.3 General discussion

1.3.1 Denial existence of Emptiness (D234b3–235a2, P280a7–b6)

de ltar ni mi 'dod de^{xiii} žes bya ba la sogs pas ni khyed dbu ma pas bstan pa'i tshul gyis gal te 'di dag kun stoñ na 'byuñ ba dañ / 'jig pa med pas 'phags pa'i bden pa bži la sogs pa dag med par 'gyur ba de ltar ni^{xiv} kho bo cag sde pa gžan dag mi 'dod de / ji skad smras pa'i skyon du thal bar 'gyur ba'i phyir ro // de dag ni khyed dbu ma pa dños po rnamś no bo ñid med pa ñid du smra ba'i tshig la glags de lta bu yod par^{xv} bstan pa yin no //

glags yod pa'i tshig de las bzlog pas sde pa gžan dag ñid ji ltar 'dod pa'i skabs kyi don ñid bstan pa'i phyir / ji skad smras pa'i skyon du thal bar 'gyur ba rnam par bzlog^{xvi} pa ni stoñ pa ñid ma yin žin^{xvii} ^{xviii} 'byuñ ba dañ / ^{xix} 'jig pa dag kyañ yod pa yin na ^{xx} no bo ñid yod pa ñid dañ / 'byuñ ba^{xxi} dañ^{xxii} ^{xxiii} 'jig pa'i chos can ñid yin pas / ^{xxiv} bsgrub par bya ba^{xxv} chos no bo ñid yod pa ñid dañ sgrub pa'i chos 'byuñ ba dañ / ^{xxvi} 'jig pa'i chos can ñid yin pa^{xxvii} mñon no ^{xxviii} žes bya ba'i tshig gi don te ^{xxix} glags yod^{xxx} pa'i tshig yin pa'i phyir ro ^{xxxi} žes bya ba smras so //

de ñid dpeś bstan pa'i phyir / dper na gal te sgra rtog pa yin na / ^{xxxii} ma byas par 'gyur te / ^{xxxiii} ma byas pa ni rtog^{xxxiv} par dmigs par 'gyur la / dmigs na byas par mi 'gyur ro ^{xxxv} žes bya bas / ji skad smras pa'i skyon du thal bar 'gyur ba rnam par bzlog pa ni ^{xxxvi} mi rtog pa la byas pa yod pas sgra ni mi rtog ste ^{xxxvii} byas pa'i phyir ro ^{xxxviii} žes bya bas bsgrub par bya ba ^{xxxix}

ⁱ PPrT-DC 'jig rten pa'i : PPrT-PN 'jin pa'i : PPrT-G 'dzin pa'i ⁱⁱ PPrT-G ins. 'bras ⁱⁱⁱ PPrT-N om. la ^{iv} PPrT-G // ^v PPrT-PNG also / ^{vi} PPrT-PNG om. // ^{vii} Cf. PrasP: chos ma yin pa (P dañ) chos ñid dañ // . ^{viii} PPrT-DC pa yi : PPrT-PN pa'i ^{ix} PPrT-PNG / ^x PPrT-PNG om. // ^{xi} PPr-DC: gžan yañ 'bras bu yod pa dañ / chos ma yin pa dañ / chos ñid dañ / 'jig rten pa'i tha sñad ni / kun la'añ gnod pa byed pa yin //; PPr-PNG: gžan yañ / 'bras bu yod pa dañ / chos ma yin dañ (G ins. /) chos ñid dañ // 'jig rten pa'i tha sñad ni / kun la'añ gnod pa byed pa yin // ^{xii} MMK k. 6: sūnyatām phalasadbhāvam adharmam dharmam eva ca / sarvasamvyavahārāmś ca laukikān pratibādhasē // ^{xiii} PPr-CDNG ins. /, PPr-P ins. // ^{xiv} PPrT-C na ^{xv} PPrT-G ins. par ^{xvi} PPr-CDPG zlog ^{xvii} PPrT-PNG žes ^{xviii} PPr-DCNG ins. /, PPr-P ins. // ^{xix} PPrT-N om. /, PPrT-G om. dañ / ^{xx} PPr ins. / ^{xxi} PPrT-PNG bas ^{xxii} PPrT-PNG om. dañ ^{xxiii} PPr-PNG ins. / ^{xxiv} PPrT par : PPr pas / ^{xxv} PPr ins. dañ / sgrub pa'i chos mñon no // (DC om. //) ^{xxvi} PPrT-PNG om. / ^{xxvii} PPrT-PNG par ^{xxviii} PPr om. chos no bo ñid yod pa ñid dañ sgrub pa'i chos 'byuñ ba dañ / (P om. /) 'jig pa'i chos can ñid yin pa (P par) mñon no ^{xxix} PPr ins. / ^{xxx} PPr-G om. yod ^{xxxi} PPr ins. // ^{xxxii} PPr om. / ^{xxxiii} PPrT om. / ^{xxxiv} PPrT-DCPN rtog ^{xxxv} PPr-PNG ins. // ^{xxxvi} PPr ins. / ^{xxxvii} PPrT, PPr-PNG ins. / ^{xxxviii} PPr-PNG ins. // ^{xxxix} PPr ins. dañ / sgrub pa'i chos mñon no

chos mi rtag pa dañ /ⁱ sgrub pa'i chos byas pa ñid yin pa mñon noⁱⁱ zes bya ba'i tshig gi don
yin pa bzin noⁱⁱⁱ zes bya ba smras so //

1.3.2 Presentation of five-part syllogism (D235a2–5, P280b6–281a3)

de ñid kyi rjes su dpag pa bstan pa'i phyir / 'dir sbyor ba'i tshig ni don dam par dños po rnam
ño bo ñid yod pa kho na yin te / 'byuñ ba dañ^{iv} jig pa'i chos can ñid yin pa'i phyir ro // gañ dag
ño bo ñid med pa de dag la ni 'byuñ ba dañ 'jig pa dag^v ma mthoñ ste / dper na nam mkha'i
me tog^{vi} bzin no // dños po rnam la^{vii} ni ma byuñ ba las^{viii} 'byuñ^{ix} ba dañ /^x byuñ nas 'jig pa
yod pas /^{xi} de'i phyir gtan tshigs ji skad smos pa'i mthus don dam par dños po rnam ño bo
ñid yod pa^{xii} kho na yin no zes bya ba smras te /

de dag ni chos can dañ / bsgrub par bya ba chos dañ / sgrub pa'i chos dañ / chos mi mthun pa'i
phyogs kyi dpe dañ / ñe bar sbyar ba'i sbyor ba dañ / mjug bsdu ba yin par go rims^{xiii} bzin du sbyar
te / 'di ni nam mkha'i^{xiv} me tog lta bu gañ la 'byuñ ba dañ / 'jig pa med pa de ni ño bo ñid med pa
yin gyi / dños po rnam la^{xv} ni 'byuñ ba dañ^{xvi} jig pa dag yod pa'i phyir des na don dam par dños
po rnam ño bo ñid yod pa kho na yin no zes^{xvii} zer ro //

re zig de dag ni stoñ pa ñid kyi mi mthun pa'i phyogs kyi khyad^{xviii} par yin te / phyogs sña ma
smra ba dag gi gzuñ yin par sbyar ro //

Notes

¹ 「de bzin du」を「前章と同様に」と解釈した。各章の冒頭部は chap. 0.2 において示されるように、「章の関連を示す箇所 (rab tu byed pa'i mtshams sbyar ba'i skabs)」と呼ばれる。「de bzin du」を「これまでの章と同様に」と解釈することも可能であるが、第 II 章の冒頭部が「第 I 章に於いて『一切の存在は生起しない』と述べられた〔主張〕についての異論を排除しよう」と (Nāgārjuna が) お望みになったことにそって、第 II 章は書かれるのである。(rab tu byed pa dañ por dños po thams cad skye ba med pa bstan pa'i mi mthun pa'i phyogs bstsal bar bzed pa'i dbañ gis rab tu byed pa gñis pa brtsam mo) と説くなど、直前の章の主題について章の冒頭部においてふれる傾向が見られる (第 III, IV 章など)。したがって、この第 XXIV 章冒頭部における「空性についての〔章〕独自の異論を否定することによって」とは、第 XXIII 章における「〔空性についての〔章〕独自の異論を否定することによって〕を受けての「同様に」であり、「これまでの章全体」ではなく「直前の章」と「同様に」と理解すべきであろう。また、VyY は「mtshams sbyar ba (*anusamḍhi)」について『関連』が説かれることによって、諸語の順序・関連が〔理解される〕。(mtshams sbyar ba brjod pa las ni tshig rnam kyi go rims 'brel ba'o) (LEE ed. p. 7.16-17.) と解説している。

ⁱ PPrT-PNG om. / ⁱⁱ PPr om. chos mi rtag pa dañ / (P om. /) sgrub pa'i chos byas pa ñid yin pa mñon no ⁱⁱⁱ PPr ins. // ^{iv} PPr ins. / ^v PPr om. dag ^{vi} PPr ins. dag ^{vii} PPr om. la ^{viii} PPrT-DC la ^{ix} PPrT-PNG byuñ ^x PPr-G om. ba las 'byuñ ba dañ / ^{xi} PPrT om. / ^{xii} G par ^{xiii} NG rim ^{xiv} PPrT-G nam mkha' ^{xv} PPrT-DC om. la ^{xvi} PPrT-G ins. / 'jig pa de ni ño bo ñid med pa yin gyi / dños po rnam la ni 'byuñ ba dañ ^{xvii} PPrT-PNG om. zes ^{xviii} PPrT-P khyed

² 「khyad par」を「〔章〕独自の」と訳した。「khyad par」は諸研究において「特定の」と訳される傾向にあった。おそらく、Skt. が「viśeṣa」であると予想されることから、何らかと比べて「別であること」「特徴的な」「特別の」「異質な」といった意味であると考えられたためであろう。しかし、PPrにおいてこの「khyad par」が何と比べて「khyad par」であるのかは理解し難い。「著者、あるいは中観派と比較して」とも考えられるが、この意味は直前の「異論 (mi mthun pa'i phyogs)」が担っており、意味が重複してしまい、違和感が残る。PPrT を考察する限り「khyad par」は、

・「～である」と前主張を設定すること

第 IV 章 de'i khyad par z'es bya ba ni rañ gi sde pa dag gis 'og nas don dam par skye mched rnams yod pa kho na yin te phuñ pos bsdus pa'i phyir ro z'es bya ba la sogs pa phyogs sña ma ñe bar g'zag pa 'byuñ ba dag yin no //

第 VI 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol po'i phuñ po dañ / khams dañ skye mched dag yod pa ñid du ston pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 VII 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos phuñ po dañ khams dañ skye mched dag yod pa ñid du ston pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa /

第 VIII 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos phuñ po dañ khams dañ skye mched dag yod pa ñid du ston pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 IX 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos phuñ po dañ khams dañ skye mched dag yod pa ñid du bsgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 X 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos phuñ po dañ khams dañ skye mched dag yod pa ñid du ston pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XI 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos phuñ po dañ khams dañ skye mched dag yod pa ñid du bsgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XII 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos phuñ po dañ khams dañ skye mched dag yod pa ñid du sgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar b'zag pa

第 XIV 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid du bsgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XV 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du sgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XVI 章 khyad par z'es bya ba ni pha rol po dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du bsgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XVII 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du sgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar b'zag pa

第 XIX 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du smras pa'i phyogs sña ma ñe bar b'zag pa

第 XXII 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du bsgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XXIV 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du sgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XXV 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du bsgrub pa'i phyogs sña ma ñe bar g'zag pa

第 XXVI 章 de'i khyad par z'es bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du bsgrub pa'i phyogs

sña ma ñe bar gźag pa

第 XXVII 章 de'i khyad par źes bya ba ni pha rol pos dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du sgrub pa'i phyogs
sña ma ñe bar gźag pa'o //

・「～である」と述べること

第 V 章 de'i khyad par źes bya ba ni pha rol pos sa la sogs pa dag yod pa ñid du ston pa'i gtan tshigs su mtshan
ñid yod pa'i phyir ro źes smras pa dag yin no //

第 XX 章 de'i khyad par źes bya ba ni dus ño bo ñid yod pa ñid du smra ba'i khyad par

・「～である」という主張

第 XXI 章 de'i khyad par źes bya ba ni pha rol pos don dam par dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du bsgrub
pa'i phyogs kyi khyad par

第 XXIII 章 de'i khyad par źes bya ba ni pha rol pos don dam par dños po rnams ño bo ñid yod pa ñid du
bsgrub pa'i phyogs kyi khyad par

というように、対論者の主張について「khyad par」と述べている。当然「～」の箇所には章ごとに異なる主張が当てはまり、「前主張」を設定する場合としない場合の「khyad par」の説明の仕方が異なることから、章ごとの対論者の主張内容、主張の仕方の相違を「khyad par」と解釈して「〔章〕独自の」と翻訳した。

³Cf. PPrT D wa 5b3: slob dpon Legs ldan 'byed; Also See PPrT(D wa 1b2-4, P wa 1b8-2a1): gañ phyir śes rab sgron ma yis // śes rab pha rol phyin rtogs dañ // sñems rgol thams cad tshar bcaid pa // thob 'gyur de phyir bde gśegs dañ // byañ chub sems dpa' rnams la yañ // bsam pa thag pas phyag 'tshal nas // bla ma'i mthu yis bdag gis ni // de'i don gsal bar nmam bśad bya // (〔師は〕『智慧の灯火』によって智慧の完成を証得なされ、すべての高慢な対論者を論破するに到られた。したがって、善逝と菩薩たちにも至心に礼拝したうゑで、師 (= Bhāviveka) の力に導かれ、わたくし [Avalokitavratā] はその『智慧の灯火』の 意味を明らかに説明しよう)。

⁴「〔目的〕にそって (dbañ gis)」の解釈は熟考を要した。この解説における二つの「don」、そして「bltas te」は甚だ難解であり、諸研究においても見解の分かれる点である。諸研究において「don」を「意味」として理解し、『～にそって』とは契機の意味と後述部とを結びつけるという意味」という理解が見られる。しかし、この理解では「～にそって」を「～と結びつける」と理解することとなり整合性がとれない。あくまでも「～にそって」とは「目的にそって」であり、「後述部と結びつけて」を意味するとは考え難い。「～にそって」の読解において注目すべきは後述において、『その〔異論を〕否定することによって』について言えば、『それを否定するために第 XXIV 章は書かれるのである』とつなげるべきである。」と説かれる点である。この記述は、第 XXIV 章における目的が [1] 対論者の異論を否定することと、[2] 「〔四〕 聖諦は無自性に他ならない」と説くことの二つであることを示す。さらに、この異論を否定するという目的は、「否定することによって (dgag pas)」が示すように、第二の目的、「〔四〕 聖諦は無自性に他ならない」と主張することの契機となっている。したがって、「dam bcas pa la 'jug pa'i rgyu'i don」をそれ自体が目的であり、且つ第二の目的の契機となるものと解釈して、「『四聖諦は無自性に他ならない』という」主張を始める契機〔として示される〕目的」と翻訳した。この場合、註釈中の第二の「don」は、本章中における第二の目的、「四聖諦は無自性に他ならない」と主張することを示すと考えるのが妥当であろう。この第二の目的は章後半部において説かれるものであるので、「gźuñ 'og nas 'byuñ ba dañ sbyar ba'i don」は「後述部と結びつける為に」、 「後述部と結びつける目的」ではなく、後述部において言及される目的と解釈して「後述部に関連付けられる目的」と翻訳した。二つの「don」は「～にそって (dbañ gis)」の意味内容を示すのではなく、「～にそって」

の目的語である二つの「目的」を示すと考えるのが妥当であろう。さらに、「bltas te」は「～と見なして」と解釈されてきたが、二つの「don」が二つの「目的」であれば、『～にそって』とは、二つの目的と見なして」という解釈は「～にそって」についての直接の註釈がないこととなり、意味をなさない。したがって、「bltas te」を「～にそって」についての註釈と理解して、「依拠して」と翻訳した。以上の理解に基づき、この「〔目的〕にそって (dbañ gis)」についての一文を二つの目的に依拠して章が構成されることを示す一文と解釈し、『〔目的に〕そって』ということばは、[1] 本章においても『四聖諦は無自性に他ならない』という主張を始める契機〔として示される〕目的と、[2] 後述部に関連付けられる目的〔の二つに〕に依拠して〔ということ〕であって」と翻訳した。

⁵この dbañ gis (*vaśāt) の解釈に関して、上記の注では言及しなかったが、一郷氏による指摘を挙げておきたい。同氏は PPr 第 XVIII 章の翻訳を試みた一郷 [1967b, p.92, n. 1] において、Avalokitavrata が PPrT 第 II 章で、この dbañ gis という表現について、*Vaiśeṣika-sūtra* や *Mīmāṃsā-sūtra* の最初の導入部分で用いられる athāto という語の使い方と同じである、つまり「～の後に～がある」という意味であると注釈していることを指摘している。ただし、上記の注で示したとおり、本稿で挙げた訳においても『本章においても〔四聖諦は無自性に他ならない〕という主張を始める契機〔として示される〕目的』に依拠した後に『後述部に関連づけられる目的』に依拠して」というように、実質的にこの意味が読み込めることから、ここでは一郷氏による指摘を紹介するとどめる。

⁶「造論者 (bstan bcos mdzad pa)」を Bhāviveka と理解するか、Nāgārjuna と理解するか、二通りの可能生が存在する。しかし、これまで確認できた範囲に於いて、Bhāviveka の言明である PPr の文章が PPrT に引用される場合に尊敬語が用いられることは一度もない。一方、この箇所では行為主体である造論者に対し、mdzad pa という尊敬語の動詞が用いられている。このことから、この造論者が意味するのは、Bhāviveka ではなく、Avalokitavrata が尊敬語を用いる可能生のある人物で、尚かつ造論者と呼ばれうる Nāgārjuna であると想定するのが妥当であろう。

⁷「dnos po thams cad skye ba med」は第 I 章第 1 偈を指していると思われる。なお Avalokitavrata は同様の表現を第 I 章においても用いている (PPrT D wa 8a5, P wa 9b4-5)。

⁸ここでの「造論者 (bstan bcos mdzad pas)」も、以前の注のとおり、Nāgārjuna であると考えられる。ただしその場合、述語は「語ったのである (smras te)」という尊敬語ではない動詞となり、問題が生じる。しかしこの一連の記述とほぼ同じ記述は、第 XXIV 章のみに留まらず、第 III 章から第 XXVII 章に至るまでの全ての章に見出され、一部の章 (第 III, IV, VI 章) においては、この「造論者 (bstan bcos mdzad pas)」という行為主体を示すことばの直前に「注釈者 ('grel pa byed pas)」というもう一つ別の行為主体が挿入されていることが分かる。例えば、第 VI 章においては次の様に書かれている。('dir rab tu byed pa drug pa brtsam pa'i skabs su yan 'grel pa byed pas snar bstan bcos mdzad pas ji ltar dam bcas pa de la 'jug pa'i rgyu'i don gyi dbañ du byas nas da ni stoñ pa ñid kyi mi mthun pa'i phyogs kyi khyad par dgag pas źes bya ba smras te /) こうした事実に基づくならば、「語ったのである (smras te)」の主語は、「注釈者」即ち「Bhāviveka」であると想定するのが妥当であろう。ただし、そうであるとしても、今度は「造論者」という行為主体に対する述語が存在しないことになり、この箇所は文法的にみて大変読み難い文章となっていることは事実である。実際に、先行する各翻訳に於いても、訳出に苦労した跡が伺える。そこで、「造論者」を Nāgārjuna とみなすという理解を保持し、文脈に沿って、造論者という行為主体に対して「主張なされた」という述語を補った翻訳を提示した。

⁹See Ames[1993, n. 102]; MacDonald [2003, 191.13–192.5]; 那須 [2000a, n. 8].

¹⁰ 元々のテキストは gal te 'di ltar kun stoñ pa yañ stoñ pa'i phyir となっており、「もしこのようにすべてが空であるということもまた空であるから」という意味になるが、このままでは文脈上も意味をなさない。しかし、これとほぼ同内容の文章が PPrT 第 XXV 章に見出される。前後の文章も含め引用するならば次の如くである。「たとえば石女の子は無自性であるから、それ（石女の子）に生じることと滅することが存在しない如くに、もしこれらがすべて空であるなら、それもまた無自性に他ならないから、それ（これら全て）にも生じることと滅することが存在しない、と考えられる (dper na mo gśam gyi bu ni ño bo ñid med pa'i phyir de la 'byuñ ba dañ 'jig pa med pa de bžin du gal te 'di dag kun stoñ na de yañ ño bo ñid med pa'i phyir de la yañ 'byuñ ba dañ 'jig pa med do žes bya bar bsams so //)」(D249b2-3, P297a7-8)。二つの文章を比べる時、それが「空」であるか、「無自性」であるかの差はあるものの、文意として、両者は同内容のものを意図しているように見える。そうしたなか、二つの文章の構造上の大きな差は、当該の文章に於いて pa となっている箇所が、第 XXV 章においては na de となっている点である。少なくとも、この第 XXV 章の読みの方が意味をなしていると考えられることから、ここではテキストを訂正した。

¹¹ この集に関してのみ、「諦」を補った。この直前のセンテンスは「苦諦の非存在→集諦の非存在」（苦が生じる原因である集が存在しない故に）である。つまり、このセンテンスの構造は「X 諦が存在しないので Y 諦が存在しない。Y が～でない故に」となっており、問題の箇所をこの構造に当てはめると、「集〔諦〕が存在しないならば滅諦は存在しない。それ〔集〕が滅することがないからである」となり、「諦」が補われるべきであると考えられる。なお、同様の理由から直後のセンテンスも、直訳は「そして滅諦がないならば、正見を始めとする滅に向かう道さえも存在しないから、道諦もまた存在しない。」であるが、直前のセンテンスと合うように順序を入れ替えて翻訳した。

¹² Cf. PPr 第 XXV 章 [D tsha 238a4–5, P tsha 298b2–5]: 'dir smras pa / don dam par mya ñan las 'das pa ni yod pa kho na yin te / skye ba dañ rga śis 'jigs pa rnams de thob par bya ba'i phyir 'jug pa yod pa'i phyir ro // med pa la khyad par can rnams de thob par bya ba'i phyir 'jug pa ma mthoñ ste / dper na rus sbal gyi sbu bžin no // mya ñan las 'das pa la ni de thob par bya ba'i phyir de khyad par can rnams lam sgom pa la 'jug pa yod pas de'i phyir / don dam par mya ñan las 'das pa ni yod pa kho na yin no //

¹³ 榎本 [2009] に従い、「satya」を「事実」と訳した。

¹⁴ *Ārya-Akṣayamatīrdeśasūtra-tīkā* にも一部類似した「聖諦」の三種の語義解釈が見出される。(1) 'phags par 'gyur ba'i bden pa yin pas na 'phags pa'i bden pa'am / (2) 'phags pa rnams kyis bden pa de dag de kho na lta bu yin par bden pa'i sgo nas yañ dag pa ji lta ba bžin mkhyen ciñ gzigs kyi / byis pa rnams kyis yañ dag pa ji lta ba bžin du mi śes mi mthoñ bas na / de'i phyir 'phags pa bden pa rnams žes bya'o // yañ na (3) 'phags pa sañs rgyas dañ sañs rgyas kyi ñan thos rnams kyis bśad pa'i bden pa yin pas na 'phags pa'i bden pa ste / 'phags pa ma yin pas bśad rnams kyañ de bžin gśegs pa rnams kyi byin gyi rlabz kyis 'chad pa dañ / bcom ldan 'das kyi bstan pa 'dzin pa dañ / 'phags par 'gyur ba'i rgyu byed pas na 'phags pa'i bden pa žes bya'o // (Braarvig [1993, p.269, n. ll.16-23]).

¹⁵ 「四聖諦の非存在→僧宝の非存在→法宝の非存在」という順序でなされる PPrT の説明は、これ以後に示される MMK あるいは PPr による「四聖諦の非存在→僧宝の非存在」かつ「四聖諦の非存在→法宝の非存在」という順序でなされる説明と齟齬をきたしている。また「仏の定義 (chap. 1.2.7.1)」の説明だけを見れば「四聖諦・僧伽・法の非存在→仏の非存在」となるであろうか。

¹⁶ saddharma について, PrasP は「正しいもの, すなわち勝れたものにとっての法」であると註釈する。PrasP. p.487. satām āryāṇām dharmāḥ saddharmaḥ /.

¹⁷ 「目的がなければ手段もまた存在しえない」の目的と手段が具体的に何を指すかについて, MMK・PPr と PPrT とに違いがあると思われる。前の注で触れたように, MMK あるいは PPr は「四聖諦の非存在→法宝の非存在」と考えているので「手段-法宝, 目的-四聖諦」であり, それに対して PPrT は「僧宝の非存在→法宝の非存在」と考えているので「手段-法宝, 目的-僧法」ということになる。つまり手段が「法宝」であるのは両者一致しているが, 目的に関しては相違が見られる。内容としてはどちらも文脈上, 問題はない。

¹⁸ 「法を理解せしめるもの」が僧伽であるということは不可解である。文末の「rtogs par byed pa'o」を「rtogs par mdzad pa'o」と読み替えることが可能であるならば, その場合翻訳は「〔すなわち〕煩惱の薪を焼く者(仏)にとって心地よいもの, つまり法と, かれ(煩惱の薪を焼く者)が理解せしめるもの, つまり僧伽である」となろう。Cf. PPrT D244b7-a1.

¹⁹ これ以後は「Buddha」という語に対するいわゆる語義解釈 (etymology) を提示していると考えられる。

²⁰ ここでの bzod ldan の訳「(四聖諦との) 結びつきを具備している」は, bzod pa ということばに対する「四聖諦とのしっかりとした結びつき (stedfast adherence to the four truths)」という Jäschke の Tibetan-English dictionary の説明に従った。

²¹ 『雜阿含經』(大正 99. 28a13-14): 明智所了知 所應修已修 應斷悉已斷 是故名爲佛; 『別譯雜阿含經』(大正 100. 467a17-18): 明達了諸法 應修者悉修 應斷盡斷除 以是故名佛 (*なお, この引用經典の特定にあたっては龍谷大学大学院研究生・小野嶋祥雄氏に貴重な指摘をいただいた。記して謝意を表したい)。

²² 引用經典不明。ただし, 「諸法を理解しているので仏陀である」というこの偈頌と同趣旨の内容は『雜阿含經典』, 『大品般若經』, 『華手經』, 『大智度論』など様々な文献に見られる。(Cf. 『望月』5, p. 4436)。

²³ この「【1】知つまり智慧と, 【2】知の対象つまり法と, 【3】理解させられる者たちつまり導かれる者たち」は直前に示される三種の仏の定義とそれぞれ対応している。

²⁴ Cf. 丹治 [2006, p. 155, n. 100].

²⁵ Cf. PPrT chap. I, D wa 1b4-5: gañ gi phyir 'jug rten ni las sam bstan bcos 'bras bu dañ bcas pa la 'jug gi 'bras bu med pa la mi 'jug pa de'i phyir dbu ma'i bstan bcos la chos thams cad kyi de kho na ñid rtogs pa ni kun rdzob tu 'bras bur rnam par g'zag go // don dam par ni 'bras bu'i rnam par rtog pa med de / (世間の人々は, 果報をとまなう行為か論典には着手するが, 果報がないものには手をつけないので, 中観派の論典においては, 一切法の真実を証得することが世俗的な果報として確立しているのである。〔ただし〕勝義としては, 果報を分別することはない)。

参考文献

Ames, William

1993 “Bhāvaviveka’s Prajñāpradīpa, A Translation of Chapter One: ‘Examination of Casual Conditions’ (Pratyaya) Part one”, *JIP* 21, pp. 209-259 ([1994] Part two, *JIP* 22, pp. 93-135).

2000 “Bhāvaviveka’s Prajñāpradīpa: A Translation of Chapter Six, Examination of Desire and the One Who Desires, and Chapter Seven, Examination of Origination, Duration, and Cessation [from the Tibetan]”, *Buddhist Literature* Volume 2, pp. 1-91.

Braarvig, Jens

1993 *Akṣayamatīrdeśasūtra Volume II, The Tradition of Imperishability in Buddhist Thought*, Solum Forlag.

Eckel, M. David

1985 “Bhāvaviveka’s Critique of Yogācāra Philosophy in Chapter XXV of the *Prajñāpradīpa*”, *Miscellanea Buddhica*, Copenhagen, pp. 25-75.

de Jong, J.W.

1977 *Mūlamadhyamakakārikāḥ*, Madras, The Adyar Library and Research Centre.

1988 “Buddhism and the Equality of the Four Castes”, *A Green Leaf: Papers in Honour of Professor Jes. P. Asmussen*, pp. 423-431.

1990 “Buddhism and the Equality of the Four Castes”, *Earliest Buddhism and Madhyamaka*, p. 58. (1988 に書かれた同名の論文のアブストラクト).

van der Kuijp, Leonard W. J.

2006 “The Earliest Indian References to Muslims in a Buddhist Philosophical Text of Circa 700”, *JIP*, 34, pp. 169-202.

LEE, Jong Choel

2001 *The Tibetan Text of Vasubandhu, critically edited from the Cone, Derge, Narthang and Peking editions*, Tokyo, Sankibo Press.

MacDonald, Anne

2003 “Interpreting Prasannapadā 19.3-7 in Context: A Response to Claus Oetke”, *WZKS*, Band XLVII.

de la Vallée Poussin, Louis

1903-13 *Mūlamadhyamakakārikās (Mādhyamikasūtra) de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Commentaire de Candrakīrti*, Bibliotheca Buddhica IV, St. Pétersbourg.

赤羽律

2003a 「年代確定の指標としての avicāraikaramaṇīya」『南都仏教』83, pp. 33-59.

2003b 「『離一多性を証因とする無自性論証』と avicāraikaramaṇīya をめぐる問題」『印度学仏教学研究』51-2, pp. (124)-(128).

一郷正道

1967a 「中観派と数論派との対論」『印度学仏教学研究』15-2, pp. 250-260.

1967b 「中観派と勝論・正理派との対論」『東方学』34, pp. 76-95.

1988 「中観」『インド仏教 1』岩波講座東洋思想 8 岩波書店, pp. 261-287.

瓜生津隆真 (Uryuzu, Ryushin)

1971 “Bhāvaviveka’s Prajñāpradīpaḥ (Chapter24)”『近畿大学教養部研究紀要』2-2, pp. 15-56.

江島恵教

1980 『中観思想の展開』春秋社.

1990 「Bhāvaviveka / Bhavya / Bhāviveka」『印度学仏教学研究』38-2, pp. (838)-(846).

榎本文雄

2009 「『四聖諦』の原意とインド仏教における『聖』」『印度哲学仏教学』24, pp. 354-336.

梶山雄一 (Kajiyama, Yuichi)

1963 “Bhāvaviveka’s Prajñāpradīpaḥ (1. Kapitel)”, WZKSO 7, pp. 37-62.

1969 『空の論理<中観>』第一部, 仏教の思想 3, 角川書店. 1997 角川文庫. (2008 『中観と空 1』梶山雄一著作集 4 春秋社 pp. 3-174 に所収).

1967 「知恵のともしび (中論清弁訳) 第十八章 自我と対象の研究」『世界の名著 2 大乘仏典』中央公論社, pp. 287-328.

1979a 『知恵のともしび』第十五章 (試訳) 『伊藤真城・田中順照両教授頌徳記念 仏教学論文集』東方出版, pp. 181-202.

1979b 「バーヴァヴィヴェーカの業思想: 『般若灯論』第十七章の和訳」『業思想研究』雲井昭善編 平楽寺書店, pp. 305-357.

1980 「『知恵のともしび』第二十五章 (前段の試訳)」『密教学』16/17 (合併号), pp. 40-68.

熊谷誠慈

2008 『中観思想史研究: インド仏教からチベット仏教, ボン教への中観思想の展開』2008 年 12 月京都大学提出博士論文.

立川武蔵

- 1982 「清弁著『知恵のともしび』第 II 章 和訳・解説 (I)」『名古屋大学文学部研究論集』84, pp. 1-26.
- 1983a 「清弁著『知恵のともしび』第 II 章 和訳・解説 (II)」『名古屋大学文学部研究論集』87, pp. 31-58.
- 1983b 「清弁著『知恵のともしび』第 II 章 和訳・解説 (III)」 Saṃbhāṣā 5 名古屋大学印度学仏教学研究会, pp. 111-128.
- 1984 「清弁著『知恵のともしび』第 II 章 和訳・解説 (IV-1)」『名古屋大学文学部研究論集』90 pp. 1-22.
- 1985a 「清弁著『知恵のともしび』第 II 章 和訳・解説 (IV-2)」 Saṃbhāṣā 6 名古屋大学印度学仏教学研究会, pp. 44-55.
- 1985b 「清弁著『知恵のともしび』第 II 章 和訳・解説 (V)」『名古屋大学文学部研究論集』93, pp. 21-41.

丹治昭義

- 1988 「生死即涅槃」『仏教思想』10 平楽寺書店, pp. 135-249.
- 2006 『中論釈 明らかなことば II』関西大学出版部.

寺本婉雅

- 1928 『ターラナータ印度佛教史』丙午出版社（うしお書店より再刊）.

長尾雅人

- 1947-48 「中観哲学の根本的立場」『哲学研究』366, 368, 370, 371（1978『中観と唯識』岩波書店, pp.1-144 に所収）.

那須真裕美

- 2000a 「Prajñāpradīpa-ṭīkā 第 24 章の試訳」『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』21, pp. 16-33.
- 2000b 「Prajñāpradīpa-ṭīkā 第 24 章の試訳 (2)」『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』22, pp. 1-19.

西山亮 (Nishiyama, Ryo)

- 2012 “Avalokitavrata on the Hindu Caste System”, *Journal of Indian and Buddhist Studies* 60, forthcoming.

能仁正顕

- 1987 「清弁著『般若灯論』第 3 章の和訳と註」『龍谷大学 大学院研究紀要 人文科学』8, pp. 16-38.

1992 「『知恵のともしび』第1章の和訳(1):縁の考察」『佛教と福祉の研究』永田文昌堂, pp. 45-66.

1996 「『知恵のともしび』第1章の和訳(2):縁の考察」『仏教学研究』52, pp. 85-103.

2002 「『知恵のともしび』第1章の和訳(3):縁の考察」『仏教学研究』56, pp. 70-93.

2006 「『知恵のともしび』第1章の和訳(4):縁の考察」『仏教学研究』60/61, pp. 15-43.

羽溪了諦

1930 「国訳一切経 中観部二『般若灯論』」大東出版社.

羽田野伯猷

1952 「数論派における解脱論と数論偈」『印度学仏教学研究』1-1, pp. 164-171.

早島慧

2011 「*Prajñāpradīpa* と *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* における勝義解釈」『龍谷大学大学院文学研究科紀要』33 掲載予定, pp. (1)-(16).

古坂紘一

1976 「大乘仏教における二諦説の一考察」『大阪教育大学紀要 第I部門』25-3/3, pp. 117-131.

1980 「中観における輪廻観の否定」『大阪教育大学紀要 第I部門』29-2/3, pp. 171-184.

1981 「中観における輪廻観の否定(第2報)」『大阪教育大学紀要 第I部門』30-1/2, pp. 1-14.

2001 「『般若灯論広註』に見る『灯論』著作の動機と意義」『密教文化』207, pp. 1-22.

松本史朗

1978 「Jñānagarbha の二諦説」『仏教学』5, pp. 109-137.

1985 「チャンドラキールティの論理学:『明句論』第一章諸法不自生論の和訳と研究(1)」『駒沢大学仏教学部研究紀要』43, pp. (78)-(124).

三宅伸一郎 (Miyake, Shin'ichiro)

1997 「カンデン寺所蔵金写テンギュールについて」『日本西藏学会々報』41-42, pp. 33-44.

2000 “Comparative Table of the Golden Manuscript Tenjur in dGa’-ldan Monastery with the Peking Edition of Tenjur”, 『真宗総合研究所研究紀要』17, pp. 1-65.

望月海慧

1989a 「『般若灯論』第11章試訳」『棲神』61, pp. (25)-(49).

1989b 「『般若灯論』第13章試訳」『大学院年報 立正大学院文学研究科』7, pp. 69-86.

1990 『般若灯論』第12章試訳『棲神』62, pp. (1)-(27).

1991 『般若灯論』第14章試訳『棲神』63, pp. (39)-(65).

1992 『般若灯論』第10章試訳『棲神』64, pp. (1)-(38).

安井広済

1961 『中観思想の研究』法蔵館 (Second Edition 1970), pp. 305-372.

(略語)

大正: 大正新修大蔵経

JIP: *Journal of Indian Philosophy*

MMK: *Mūlamadhyamaka-kārikā* edited by de Jong in 1977

PPr: *Prajñāpradīpa*

PPrT: *Prajñāpradīpa-tīkā*

PrasP: *Prasannapadā*

VyY: *Vyākhyāyukiti*

WZKS: *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens*

WZKSO: *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd – und Ostasiens*

『望月』: 望月信亨『望月仏教大辞典』世界聖典刊行協会, 1954.

『論書篇』: 塚本啓祥, 松長有慶, 磯田熙文編著『梵語仏典の研究 3 論書篇』平楽寺書店, 1990.

The XXIVth chapter of the *Prajñāpradīpa-ṭīkā*,
Tibetan Text and Japanese Translation (1)
– *anusam̐dhi* & *pūrvapakṣa* –

Summary

Nāgārjuna's *Mūlamadhyamaka-kārikā* (=MMK) chapter XXIV is well known as one that deals with "Two Truths" (*satyadvaya*). This paper is the first part of the Tibetan text and Japanese translation of Avalokitavrata's *Prajñāparadīpa-ṭīkā* (=PPrṬ) chapter XXIV, which is a subcommentary on MMK. This first part is *Anusam̐dhi* and *Pūrvapakṣa*. *Anusam̐dhi* is the portion that shows the relation of this chapter to the preceding chapter. In *Anusam̐dhi* of PPrṬ-XXIV, it is shown that this chapter's purposes are to deny counterargument against the idea of emptiness (*sūnyatā*) and to emphasize that there is no intrinsic nature (*svabhāva*) in the Four Noble Truths (*catvāri āryasatyāni*). *Pūrvapakṣa* shows the Opponent's counterargument. Opponent insists that if there is no intrinsic nature in the Four Noble Truths, the Four Fruits do not exist, so the Strivers for the Fruits do not exist, and the Attainers of the fruits, the *Samgha*, the *Dharma* and the *Buddha* do not exist too. Thus, the opponent insists that there is a Failure of Three Jewels to exist, and the idea of lack of intrinsic nature (*niḥsvabhāva*) causes these failures.

<キーワード> *Prajñāpradīpa-ṭīkā*, Avalokitavrata, Bhāviveka, *Anusam̐dhi*, *Pūrvapakṣa*, 中論, 般若灯論, 觀四諦品